

## 視察報告

### 中国見聞記

(1981)

——とくに人民の生活に視点を向けて——

浅見益吉郎

What I have seen in China, with special reference to people's lives.

Masukichiro Asami

今春(1981年3～4月)私は半月間近く中国各地(上海,揚州,南京,西安,洛陽,北京)を旅行した。この機会を、私は単なる名所古蹟の観光よりも中国人民の生活ぶりの見聞に関心の主点を向けたが、もとより長期滞在している研究者や報道人でさえ決して容易でない主題なので、一介の旅行者に到底満足な成果が得られるとは、当初から期待していた訳ではない。

しかし、帰国後も幾らかの関係文献を読み、私なりに印象をまとめたので、浅識誤認の謗りは免かれまいだろうが敢えて記述したい。

いう迄もなく現在の中国(中華人民共和国)は共産党主導下の社会主義国家で、その主体をなす漢民族(全人口の94%)は我々と同じ蒙古人種なので外見の見分け難い程似ており、歴史的な両国の交流により相互の文化に数々の共通点を形成しているが、現時点での日中両国民の生活環境と条件には、単に政体の相違に止らず、ほとんど類似点を見出し得ない。只一つ共通する条件を強いて探せば、両国共に今世紀中頃(1945～50)、荒廃し切った国土と飢え疲れた多くの国民を抱えた壊滅状態から、新しい国作りを開始したという点であろう。以後30余年の間にわが国はひたすら工業立国の道を走り続け、幾多の経済的難関を突破して自他共に許す先進工業国へ変身したのに対し、中国は共和国発足(1949)当時、焦眉の急務だった人民(当時の推定人口は約5億)の飢餓よりの救済には一応成功したものの、相踵ぐ天災や政変が禍いして、世界有

数の豊富な天然資源をその国土に擁し乍ら、現在なお高からぬ生産水準(延いては生活水準)に低迷を余儀なくされている。

単純に生活水準指標と見做す訳ではないが、両国の国民1人当りのGNP\*1を比較すれば中国は222ドル、日本は8,725ドルと数十倍もの較差が示されているのである。

このような現況を踏まえ、以下に私の見聞に文献や報道から得た知識、情報を交えて、中国人民の生活実態へのアプローチを試みたい。

#### 1. 家族構成と家計

中国の家庭は伝統的に大家族主義で、都市労働者の間には漸次核家族化の傾向もうかがわれるが、人口の8割を占める農村では依然として複数世代同居を家族構成の常態としているようである。現に経済的理由もあってのこと乍ら、男女双方とも両親との同居をより有利な結婚条件としている点は、“家付き、カー付き、……”が理想(?)のわが国とは根本的な家族観の差異が認められる。

社会主義国だけに各家庭は組織化された地域社会体制(農村では人民公社～生産隊、都市では職場団体や居住地区ごとの街道委員会)にガッチリ組み込まれて

\*1 国民総生産。算定方式や調査機関の相異によりかなり数値の差が見られるが、ここには尾上悦三著：中国経済入門(東洋経済新報社〔1980〕)所載の1978年の数値を掲げた。

いるので、共同社会的連帯感はわが国より遥かに強い。

都市労働者の平均的月収は40～60元（1元＝130～140円）程度で、日本なら3日と暮せそうもないが、生活必需品価格が厳しく統制されている中国では、独身者も共働き夫婦もそれなりに生計を維持して幾らかの貯蓄も可能な金額なのである。しかし農村では食糧は現物支給されるとは言え、公社より配分される現金年額は1戸当り精々500～600元程度なので、都市部との生活水準較差が生じ勝ちなのは否定できない。

従って現政権は、かのプロレタリア文化大革命（以下“文革”と記す。1967～76）中には“走資派的行為”として禁止されていた自留地<sup>\*2</sup>の復活を認め、食糧買上価格の引上げも実施して農民の生活と勤労意欲の向上をはかっている。しかし他方、必然的に生ずる食糧費高騰は都市生活者の生計圧迫とつながるので、79年以降都市労働者にも若干の食糧手当を支給し生計の緩和をはかっているが、両者相俟って国家経済にインフレ傾向の生ずる恐れも胚胎しているように思われる。

現時点での中国人民の生活水準は、前記のGNP/人値で示されるよりずっと高いと判断されるが、経済政策大転換の過渡期だけに、今後の推移は微妙で予断を許さないだろう。

## 2. 住居について

中国人の暮して最も切実なのは住宅問題だと聞いた。家屋は原則として公有で家賃は只同然（高くても4～5元、独身者アパートなら0.5～1元程度）の代わりに、1人当りの居住面積は極めて小さく、世界一の超過密都市上海では、何と2.8㎡（0.85坪）である。他都市ではこれ程のことはないにしても、“ウサギ小屋”と蔭口をたたかれているわが国の平均居住密度（22.65㎡/人）<sup>\*3</sup>と比較しても数倍高いことは間違いなからう。

中国の伝統的住宅は外囲に土や煉瓦の塀をめぐらせ、窓は小さく、狭い入口の正面にも障壁を設けた閉鎖的構造のものが多く内部をうかがい知る由もないが、外見的には通風採光が不十分なように思われる。都市では鉄筋の集合住宅も珍らしくないが、一部の例外<sup>\*4</sup>を除き、居住性のすぐれていそうな建物はほとんど見

<sup>\*2</sup> 1人当り60㎡程度の僅かな面積だが、そこでの収穫物の処分は耕作者の自由意志に任されている宅地周辺の土地。

<sup>\*3</sup> 日本国勢図会・1981年版（国勢社）所掲の数値より算出した。ただし居住面積は畳数で示されているので、1畳＝1.5㎡として換算した。

当らなかつた。

黄河兩岸にまたがる陝西、山西、河南三省の黄土地帯には、均質緻密な黄土層をくり抜いて作った洞窟式住宅も現存しているが、次第に地上家屋へ移るよう指導が進められている。どうやら“中国人は今でも穴居民族だ”などというあらぬ汚名を封ずるための、国の面子にかけての対策のように思えるが、換気と採光さえ配慮すれば、洞窟住宅も風土の特性にマッチした住まい方のように、私には見受けられた。

## 3. 衣生活について

中国人、特に男性は詰襟紺色の人民服がほとんど“制服化”しており女性も大半はジャンパー、ズボン姿が日常的なので、衣生活は極めて簡素である。伝統的な中国服は老人か幼児の晴れ着位しか目につかなかった。材質の主流は綿布で“自力更生”を国是とし需要のすべてを国産綿で賄う努力はしているが、食糧生産と競合する面もあって、決して容易ではないらしい。現に衣糧品の大部分は配給制で、購入に際し現金に添えて“布票”<sup>\*5</sup>（衣料切符）を必要とする。

むしろ庶民の人気の最近出廻り出した合成繊維に指向し、“尼竜”（ナイロン）は木綿に勝る上質繊維、という概念が定着している。石油産国の中国にとって合繊の増産は妥当な方策であろう。旅行中私も南京郊外で合繊プラント建設現場（西独より導入）に通り返わせて、その規模の大きさに驚かされた。

文革中禁止されていたパーマメントも復活し、若い女性の容装も漸次派手になりつつある報道もあるが、私の見た限りでは休日の行楽地や劇場でも人目を惹くおしゃれにはほとんど出会えなかった。やはり未だ人前に着飾って出るには相当勇気が要るのだろう。

衣料に関連して興味深かったのは、日本では兎角批判の対象となっている合成洗剤が各地で麗々と広告を掲げていた事である。石鹼（肥皂、化粧用は香皂という）も配給制の貴重な生活資材だが、一般に硬度の高い中国の水質には合成洗剤の方が歓迎されるのも理解できる。

<sup>\*4</sup> 北京市中心の前門西大街には、首都の威信を示すかのように、見事な高層住宅群が造成されている。

<sup>\*5</sup> 気候を加味して地域差はあるが1人年間5.0～10.0m程度の割当量といわれるので、人民服1着の新調さえ、布票のやり繰り（他人への譲渡は許されているし、どうやら売買もなされているらしい）が大変だと聞いた。

#### 4. 食生活について

10億にも対する人民を飢えさせないことが民生安定の基本であり、共和国歴代の為政者が最大の眼目として食糧確保に意を注いで来たのは当然である。また食形態の異なる少数民族に対する細やかな配慮も必要であろう。

巨視的に見て、中国の現有耕地面積1.1億ha(ちなみに日本は550万ha)は世界全耕地の7%に当るが、世界人口の20数%を占める国民をこれだけの土地で扶養するのは並大抵でないことは容易に理解できよう。

農業の振興は現政権が掲げる4つの近代化目標(農業、工業、国防、科学技術)の筆頭に掲げられているが、自給体制の堅持を目的としていても、技術や資材の不足に加え頻発する旱・水害に目標達成が阻まれて、貴重な外貨を割いての食糧緊急輸入を何度も余儀なくされているのが覆い難い現実なのである。

このように決してあり余る程の需給状態にない主要食糧は現在も嚴重な価格統制下に配給制が執られているが、配給量は年令や労働量に応じて合理的に定められているので、わが国の敗戦前後に見られたような“食糧パニック状態”などが起る心配は先ずなからう。しかし副食品に関しては必ずしも十分とは言い兼ねるようで、ことに中国人の食生活に不可欠な食用油脂をはじめ獣肉肉類(中国では豚肉が最高とされ[約2.5元/kg]、牛肉より数割方高価である)、砂糖なども配給対象となっているので、中国の一般家庭では我々の概念にあるような“中華料理”を毎日の食膳に供する訳には行かないと思われる。

国・公営店で販売される食料品は公定価格だが、種類や品質が必ずしも豊富、良好とは言えず、何時でも望みの品が入手できるとは限らないので、文革後公認された自由市<sup>\*6</sup>が各地で非常に賑わいを見せている。此処では近郊農民が各自の自留地での農産物や業余製品などを“直接”持参して販売することが許されており、第三者が間接的に集荷(仲買)販売するのは“資本主義的行為”として厳禁されているという。蔬菜果実などの農産物に限らず、魚禽類、手工芸品、点心(菓子・軽食類)から薬草や鼠取り薬など様々な日用

<sup>\*6</sup> “公認”とは言え、行政当局の中にはこの種市場の存在に必ずしも釈然としていないのか、或る大都市の中心街で“この付近に「黒市」出すべからず”の制札が掲げているのを見た。“黒市”とはわが国敗戦後に横行した“闇市”と相通ずる語感があるのを興味深く感じた。

品が所狭く並べられ、公定品よりは少々割高でも品質が格段勝れているので、自由市の商品が市民の生活に潤おいを与え、農民の家計も緩和している効用はかなり大きく評価されよう。

この他にも定年退職者などが行楽地や街頭で一寸した食物や飲料などをひさぐ“小商売”も黙認されているらしい。試みに私も洛陽の街でこの種の立売り壺焼き甘藷を買って見たが<sup>\*7</sup>、日本なら1,000円は取られる美味な焼芋が僅か0.35元の廉さだったのに驚いた。事実日本ならスーパーの釣り銭位にしか使われていない1円貨とほぼ等価値(大きさも同じ位)の1分(0.01元)アルミ貨でも、中国ではそれなりの“実力”を具えていて、鉛玉の2、3個は買えるし、3枚で揚げパン、5枚もあれば氷棍(アイスキャンディ)が買えるそうである。氷棍と言えば中国の若者や子供たちに四季を通じて最も人気のある嗜好品なのである。夏場はともかく、厳冬でも売れるのは零下数十度の気温下では氷の方がずっと“温かい”からだというのが、何だか判ったようで判らない気にされてしまった。

歴とした中華風正餐も都市の料亭なら摂ることができる。二重価格制を布いているので我々“外賓”(外国人旅行者や母国訪問の華僑はすべて賓客扱いでこのように呼ばれる)からは20~40元も取る豪華料理(15~20品もあって酒代込みなので決して高いとは思わなかったが)を、中国人にはその数分の1で提供されるそうだが、それさえ彼等の数日分の収入に匹敵する価格なので、恐らく口にできる機会は多くないだろう。

駅弁(と言っても外賓用)や機内食にも数回あり付いたが、材料や調理は吟味してあるのに、栄養的バランスは全く無頓着(タップリ3種類の肉料理にとり合せの野菜はホンの少々といった調子)のものが多かったのが惜まれる。中国では加工度の進んだレトルト食品やインスタント物などは、未だほとんど開発されていない。勤労婦人の多い国柄だけにこの種食品の重宝さは日本以上に評価される筈なのだが……。また国産できない食品は物凄く高価か、極めてまずい。予めこのことは聞いてはいたが、旅行中敢えてコーヒーを4回程度注文して見た処、例外なく我々の持つコーヒーの概念とは程遠い、一種独特の褐色液体だった。

<sup>\*7</sup> 外国人がこの様な買物をするのは、余程珍らしいのか、忽ち3重ほどの人垣に囲まれて、少々薄気味悪かったが、弥次馬たちは極めて友好的で、“商取引”が成立した途端歓声を挙げて“祝福”してくれた。

## 5. 保健衛生について

“中国にハエやカは一匹も居ない”というのは些か誇張であるが、新生中国が人民の保健衛生に並々ならぬ努力を傾けている点は随所にうかがわれた。医療施設には接する機会がなかったのでよく判らないが、西洋医学と並んで伝統の漢方医による治療も盛んで、辺地や農村で活躍している赤脚医生チーチャオイーシエン（はだしの医者）の貢献度も無視できないといわれる。

公衆衛生施設で私が最も関心を持ったのは公廁コンチエ（公衆便所）の普及ぶりである。都市は勿論、農村部でもバス停ごとに設置されており、これが衛生的な“諸悪の根元”ともいえる放尿放尿の悪習追放に大きく貢献していると考えられる。しかし公廁の中身は問題で、男女に分けて外周は煉瓦で囲ってあっても全く青天井のものもあり、浅い便槽には推高く排泄物が盛り上り、扉さえ無い\*8（男女廁とも）構造なので、習俗が違ふとは言え我々には馴染み難く、衛生的にも大いに改善の余地のある代物である。ただしホテルなどのトイレは水洗の洋式なので先ず安心できる。

中国の都市はどこも清掃が行き届き清潔である\*9。行楽地や街頭にはゴミ箱や“潔淨保持”を呼びかける標語も到る所で見かけられ市民もよく協力している。これには専門の清掃労働者の作業はさることながら、地域社会の公衆衛生活動も大いに貢献しているであろう。各家庭内の衛生状況は知る由もなかったが、軒先に“衛生模範之家”と記した表彰札を掲げた家もかなり見掛けたので、徹底した指導と活動が常に行われているものと思われる。唯、多年の弊習である手涕てはな略痰だけは未だ克服できないらしく、鮮やかな手つきで歩きながら手涕をかむ人を何人も見かけたし、都市によってはゴミ箱に並べて痰壺まで歩道に設けてあった。

衛生に関連して是非触れておきたいのは中国が未来の命運を賭けて必死に取り組んでいる人口調節運動で、その最大の理由は既述のように国の人口扶養能力が最早限界に近づいているからに他ならない。中国の人口自然増加率は1970年までの2%台から1%台に低下し

\*8 西条正著：“中国人として生れた私”（中公新書・1978）によれば、公廁に扉をつけて密室構造とすれば良からぬ落書き（ワイセツなものでなく、政治諷刺の）が絶えないので、すべて取り払われたらしい。

\*9 衛生的見地から、大都市はもちろん、地方都市でもイヌ、ネコなどのペット類飼養が禁止されているので、これらの姿を街頭で全く見られないのも特筆すべきであろう。

たものの、現在でも年間自然増は1,200万人にも達するので、放置すれば来世紀頭初には現在の10億弱から12~13億に達し食糧自給の限界を超えてしまうのは火を見るより明らかである。この厳しい現実に直面して、現政権がゼロどころかマイナス成長を目標とした人口抑制政策を講じなければならない状況に追い込まれているのは当然であろう。具体的には1夫婦1児制を理想とし、これに協力する者には各種の経済的、社会的特典を保証する一方、3児以上出産しようとする者には多くの社会的制裁を覚悟しなければならぬ政策を執っている。陳慕花副首相（女性）を頂点として公式に組織された計画出産推進運動は、現在全国的な啓蒙、指導、援助（産制用具はすべて国費で無料支給、人工中絶や不妊手術には各種の経済的保償）等の凡ゆる手段を尽しての“独生子女”（一人っ子）奨励政策を強力に展開し、着々成果を収めつつあるといわれるが、知的水準の比較的高い都市ではともかく、“多子多福”が伝統的な観念となっている農民の理解と協力を得るには、今後とも辛抱強い努力を積み重ねなくてはならないだろう。

地域社会組織の中には、組織内の年間産児許可数を先ず割り出し、これを合議により出産希望家庭に割り当てるといふ、我々の常識では素直に受け入れ難い方式さえ採っているところがあるという。

斯くして、仮に1夫婦1児制が忠実に実行されたとしても、現に結婚適令子女\*10の多い中国では、当面人口の漸増は不可避で、来世紀初には総人口が10.5億を超す（以後の漸減は見込まれてはいるが）というから、当局者の苦悩と真剣な対策の程も察せられる。

ただしこのような産制政策は絶対人口の少い少数民族に対しては全然強制していない。

最新の報道（人民中国誌1981年10月号）では、中国人の平均寿命は70.8才と先進国に近づいたそうだが、人民の自らの健康づくりに対する意欲は極めて積極的で、都市農村を問わず自発的な早朝からのジョギングや太極拳体操などは全国的に驚くほど盛んである。

## 6. 耐久消費財について

文革終了以後人民の間に昂まっている日常生活内容の向上、充実の意欲を満足させるには、生活に利便と

\*10 1980年10月に制定された“婚姻法”では男子22才、女子20才からの結婚を認めているが、実際には、産児期間を少しでも短くするため、晩婚が奨励されていて、男子30才前後、女子26~8才が結婚の標準年齢となっているようである。

快適をもたらす各種工業製品（そのほとんどが耐久消費財）の品質向上と家庭への導入促進をはからねばならないことは誰の目にも明らかである。

四人組追放（1976年10月）後、華国鋒政権は重工業振興優先の近代化政策を打ち出したが、一年も経ずしてその“調整”を余儀なくされ、今や人民の要望に添う軽工業重点主義へ急速に傾いているのは、長い文革時代を通じて禁欲的な精神主義を強制されて来た反動であるとしても、時代の風潮として当然であろう。

中国人民の耐久消費財に対する渴望は想像以上である。一例を“国民の脚”ともいえる自転車（中国語でツージンチヨ自行車）にとれば、1台の価格は約180元、購入に当たっては現金の他にほぼ2年分の割当て枚数に相当する“工業券”<sup>\*11</sup>も必要である。円に換算した感覚では大したこともないようだが、中国の労働者には生活費を節約して貯蓄しても1年では無理な金額なのである。従って彼等の自転車に対する価値観は我々の自家用車に対するそれに匹敵するであろう。カメラ<sup>\*12</sup>やラジカセも若者たちの憧れの的だが手に入れるまでの苦労はほぼ自転車と同程度と思われる。ラジオは比較的安い（20～60元）のでかなり普及しているが、電気・電子製品やミシン、腕時計などの精密工業製品は性能、価格ともに世界的定評のある日本製と比較にもならない。娯楽に乏しい中国では目下テレビが人気の的で、大都市では数チャンネル放映されているが、白黒受像器で250～300元もするので、購入には数年計画の貯蓄が必要であろう。まして700元以上もするカラーテレビの個人所有など、当分の間庶民は夢にも見られない状態にある。

本年6月、六中全会（共産党中央委第六回総会）で“歴史的”な毛沢東功罪評価を敢行した現政権は、差し当って重点生産をはかろうとする15品目の耐久消費財を発表したが、その中にはわが国の家庭ではむしろ無い方が例外的な電気冷蔵庫や洗濯器（クーラーはもちろん）が含まれていない。恐らくは中国の厳しい電力事情がエネルギー多消費型の家電機器の存在を許さないのだろうが、食生活改善の上からも、せめて冷蔵庫の普及は望ましいのではないかと、私には思えてならない。

<sup>\*11</sup> 大抵の工業製品を買う際に必要な切符で、給料10元につき1枚の割で支給されるという。

<sup>\*12</sup> 中国製カメラの主流は、日本ではもう見られなくなった二眼レフで、価格は約240元。借りものもあるだろうが、行楽地では、ほぼ5人の1人位の割で自前のカメラを携えている。

## 7. むすび

思想問題には無知無関心な私の認識が誤っているかもしれないが、共産主義の窮極的な理想は“能力に応じて働き、必要に応じて取る、平等で搾取なき豊かな社会”の実現にあるのではないだろうか。

徹底的な貧困と混沌と飢餓の中から出発した中国の新しい国作りは、独創的発想を持つ理想主義者、毛沢東の指導のもとに、差し当って“窮極理想”に至る第一段階として“平等で搾取なく、飢えの恐怖より解放された社会”の実現には比較的速やかに成功し、それが亦、指導者毛に対する絶対的な信頼を築き上げた。私は考える。しかし次にかち取るべき“豊かな社会”は決して容易に実現できなかった。“豊かさ”の本質に対する模索とこれに近づこうとする行程での数多い試行錯誤。かくして荏苒20余年の歳月を“空費”し世界の大勢に大きく立遅れてしまった（大変失礼な表現とは思わうが）のが今日の中国の姿であると、私は解釈する。此処へ至る道がスタートから誤っていたのでは決してなからうが、偉大な祖先の文化的遺産と栄光に支えられた民族的自負心が、外部世界の動向を無視（ないし軽視）して、ことさら“独自性”の固執と顕示に拘わり過ぎた憾みは否定できないと、私は思っている。

今や不屈の斗志と広い視野を具えた鄧小平の主導する中国は、残存する数々の障害や矛盾を克服して真の近代化への道を力強く踏み出した。同時に長らく苦難を続けて来た中国人民の生活も亦大きな転機にさし掛かっている時点なのである。我々は一衣帯水の隣国にこのような現状の10億人民の生活があるのを常に忘れるべきではなからう。と同時に、彼等のたくましい自力更生の意欲に理解と敬意を払うのが真の友好の第一歩であると考えている。

最近、中国人の知日熱は想像以上に高いものがある。現に私も旅行中、各地で初対面の（中国に知人は居ないから当然だが）中国人から日本語や英語で話しかけられ、日本の現状について種々の質問を受けた。その何れにも、私は知る限りを率直に答えた積りだが、只一つ“あなたの月給は幾らか？”という単刀直入な質問（2人ほどにされたと記憶する）には少々戸惑いを感じた。正直なことをいえば相手に与えるショックも大きかろうと、“マアあなたの10～15倍程度か……”と、ずっと控え目に答えておいたのだが、それでさえ相手の目が驚異に輝くのを見過ごせなかった。後で知ったことだが、この程度の金額でも、政府最高首脳部

の月俸の2倍以上には相当するらしい。

西服（背広）は着ていても風采の上らない私でさえ、  
彼らはきっと“帝国主義的資本家に飽くなき搾取を受けている日本の人民大衆”の一人でなく、“独占資本家か政府高官の身内”とでも思ったことであろう。

最後に余談だが、旅も終りに近い洛陽の友誼商店  
（外賓専用の土産品店）で“黒猫”という銘柄の煙草

を見つけた時、鄧小平が初回に失脚（1967年。彼は73年復活、75年再失脚し、77年再復活して今日に至っている）した原因となった“白猫でも黒猫でもネズミを取る猫は良い猫だ”という有名な彼の発言（1962年）を思い浮べて苦笑を禁じ得なかった。果して煙草の“黒猫”君は激しい文革の嵐の間をどのように生き抜いて来たのだろうか？